

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 1

名分塚田遺跡

1985年3月

島根県鹿島町教育委員会

講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 1

みょう ぶん つか だ
名分塚田遺跡

序

ご存じのようすに当鹿島町には史跡佐太溝武貝塚をはじめ、古浦砂丘遺跡、銅剣・銅鐸を出土した志谷奥遺跡、大規模な古墳群であることが判明した奥才古墳群など縄文時代から古墳時代以降にかけて著名な遺跡が数多く知られています。

このたびは、講武地区県営圃場整備事業にともない、名分塚田遺跡の一部について発掘調査を実施いたしました。狭い範囲での調査ではありましたが、予想外に多くの遺物の出土をみ、また講武地区で米作りが始まった頃のことを明らかにするいとぐちもみえてきたように思います。圃場整備事業はひきつづき行われますが、こういった文化財の調査にもご理解をいただき、講武という農村のおこりを知り、講武を美しい連田とするために日夜努力を惜しまなかつた先人の労苦を知ることで明日への展望を開きたいものと思ひます。

終わりになりましたが、調査にあたってご指導、ご協力をいただいた島根県教育委員会、松江農林事務所、地主の方々および近隣の皆さんなど関係各位に厚くお礼申しあげて、報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和60年3月

鹿島町教育委員会

教育長 加納益雄

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が松江農林事務所の委託を受けて実施した講武地区県営圃場整備事業に伴う名分塚田遺跡の発掘調査の記録である。
2. 遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字名分987番地3他に所在する。
3. 調査は昭和60年1月16日から1月29日まで延べ12日間を費して実施した。調査体制は以下の通りである。

事　務　局 井ノ口隆義（鹿島町教育委員会教育次長）

曾田　稔（同　社会教育主事）

調　査　員 赤沢秀則（同　嘱託）

調　査　指　導 松本岩雄（島根県教育委員会文化課主事）

作　業　員 小笠　貢、石橋清美、石橋静枝、石橋積枝、石橋久栄、石橋寿子、中村
美代子

遺物整理員 石橋寿子、中村美代子、丹羽野輝子、長羅　忠

4. 調査にあたっては、土地所有者安達勝太郎、木村豊秋の両氏に終始多大な協力を得た。また、松江農林事務所耕地第一課、カナツ技建工業株式会社、鹿島測量設計有限会社の方々にも協力いただいた。あわせて感謝の意を表したい。
5. 出土遺物の時期については、八雲立つ風土記の丘資料館の三宅博士、広江耕史の両氏からご教示を得、第V章については、連藤浩巳氏から玉稿をいただいた。記して謝意を表したい。
6. 本書に用いた方位は、国土調査法による第III座標系X軸の方向を示す。したがって磁北より $7^{\circ} 12'$ 、真北より $0^{\circ} 32'$ の方向を示している。また、実測図中の高度値は海拔である。
7. 本書の編集、執筆は、曾田、赤沢が担当した。
8. 出土遺物は、鹿島町教育委員会で保管している。

目 次

序	
I 調査の経過	1
II 位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
1. 第1調査区	6
2. 第2調査区	13
IV 周辺の遺跡	
佐太前遺跡	14
V 文献からみた中世の名分地域について	17
VI 小 結	20

挿図目次

図1 鹿島町位置図	1
図2 名分塚田遺跡と周辺の遺跡	3
図3 名分塚田遺跡調査区位置図	5
図4 第1調査区平・断面図	6
図5 暗褐色土層中杭出土状態実測図	7
図6 暗褐色土層中杭実測図	7
図7 暗灰色土層以下の木片・杭 出土状態実測図	8
図8 暗灰色土層以下の木片・杭実測図	9
図9 第1調査区出土遺物実測図（1）	11
図10 第1調査区出土遺物実測図（2）	12
図11 第2調査区平・断面図	13
図12 第2調査区出土遺物実測図	13
図13 佐太前遺跡出土土器実測図（1）	15
図14 佐太前遺跡出土土器実測図（2）	16

図版目次

図版1 名分塚田遺跡周辺航空写真・遠景	
図版2 第1調査区全景・暗褐色土層中杭 出土状態	
図版3 暗灰色土層中の木片出土状態・ 第2調査区全景	
図版4 第1調査区出土杭・木片	
図版5 第1調査区出土遺物（1）	
図版6 第1調査区出土遺物（2）	
図版7 第1調査区出土遺物（3）	
図版8 佐太前遺跡出土遺物	

I. 調査の経過

昭和58年8月26日、松江農林事務所は講武地区県営圃場整備事業計画樹立に先立って、県教育委員会文化課へ計画地域内の文化財の存否について協議をされた。同日、文化課からその旨連絡を受けた町教育委員会は、直ちに町農林課へ事業前に埋蔵文化財分布確認調査の必要があるとの説明を行った。

次いで松江農林事務所から事前協議（8月29日付け）を受けた町教委は、関係者との打ち合せを経て、9月7日から9日までと10月12日に町農林課の立合いのもと分布調査を実施し、調査結果と取り扱いについて松江農林事務所あて回答（10月21日付け）をした。

以来、分布調査で遺跡として推定した地域の取り扱いについて度重なる関係者協議を続けてきたが、昭和59年10月23日の県耕地課、松江農林事務所、町農林課、町教委の四者協議で概ね次のような結論に達した。

- ①昭和59年度中に名分塚田遺跡の発掘調査を実施する。
- ②調査の目的は、本調査の必要の有無と遺跡の範囲を確認すること。
- ③経費は事業費で対応せざるを得ない。

これを受けて松江農林事務所から発掘調査の依頼（11月2日付け）があり、町教委は発掘調査の実施計画について回答（11月10日付け）を提出することにより、文化財保護法に基づく諸手続を踏むにいたった。

松江農林事務所は、埋蔵文化財発掘通知書（12月3日付け）を、町教委は遺跡発見通知書（11月30日付け）及び埋蔵文化財発掘調査通知書（12月8日付け）を、それぞれ文化庁長官宛に提出した。

次いで12月25日に松江農林事務所と鹿島町の間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を交わし、昭和60年1月7日に発掘調査に着手した。

しかし、現地の状況等からして、契約期限の1月31日までは、整理、報告業務までは完了しないことが判明したため、1月26日の変更契約により期限を3月25日まで延期し、本報告書に係る業務を完了した。



図1 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

名分塚田遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字名分 987 番地 3 他に所在する。この周辺は、島根半島部に開けた小谷が沖積作用によって小平野をなしている部分にある。この講武平野は面積約140ha、半島部では持田・川津平野とならぶかなり広い耕地面積を有する。この平野は谷奥から流れ出す多久川（現講武川）によって形成された沖積平野で古くから水稻耕作地として格好の条件をそなえていたものと考えられる。

この平野をめぐっては、縄文時代早期末から中期にかけての佐太講武貝塚が知られており、これは現在の佐陀川沿いに開けた潟湖（『出雲國風土記』にいうところの佐陀水海、えとものづかみ 恵譽陂の前身）をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を探集し、周辺の山野に鳥獣、堅果類を求めていたものと考えられる。

弥生時代になると、集落跡および墳墓群と考えられる古浦砂丘遺跡⁽¹⁾、銅鐸 2・銅剣 6 を出土した志谷奥遺跡が知られている他、名分塚田遺跡に近接しては、弥生時代から奈良、平安時代にかけての集落跡と考えられる佐太前遺跡が知られている（第Ⅳ章参照）。前期前半に古浦砂丘遺跡が成立するが、これに少しおくれて前期後半にこの佐太前遺跡が成立するよう、この集落を母集落として講武平野の開発が行われたものと考えられる。

古墳時代には講武平野をめぐる丘陵上に数多くの古墳群が築造されたことが知られている。このうち奥才古墳群は、古墳時代前期～中期頃のもので、内部主体は礫床をともなう箱式石棺や木棺などで、なかには内行花文鏡や方格渦文鏡、紡錘車形石製品などをともなうものがあった。また、付近には鶴灘山古墳群⁽²⁾、名分丸山古墳群⁽³⁾など、古墳時代前期にさかのぼりうる可能性をもった古墳群の存在も知られてきている。これらの古墳群は、佐太前遺跡を母集落として行われた講武平野の開発がかなり進み、その指導的役割を担った人々を古墳を築いて葬りうるまで余剰生産力が蓄積されていたことを示すものであろう。古墳時代後期には、講武平野の中心部分である北講武地区に横穴式石室を内部主体とする古墳 3 基が知られている（荒神古墳⁽⁴⁾、向山古墳⁽⁵⁾、岩屋古墳⁽⁶⁾）。これらの横穴式石室をもつ古墳の他に、町内全域にわたって多数の横穴墓が分布している。6世紀後半から7世紀頃にかけての所産と考えられる。その形式は、丸天井形が主流を占め、その他にわずかに三角形断面形妻入り、整正家形のものが認められている。こうした横穴墓は、現在の大字の殆どで発見されており、この時期には現在の集落の基本的な姿がすでにできあがっていたものと考えられる。

古墳時代以降、8世紀代に著された『出雲國風土記』には、講武平野は島根郡の余戸里

と生馬郷に含まれていたようである。こののち10世紀に著された『倭名類聚抄』には「多久郷」として一郷に昇格しており、この間にさらに水田の開発が進み、人口も増加したのであろう。この頃に前後して講武平野中心部には条里制が敷かれたと考えられ、現在まで三ノ坪、八ヶ坪といった字名が残っている。

この時代以降は、考古学的な資料ではほとんど部分的にしか様相が描けないため、文献資料も援用すると、平安時代末には佐太神社周辺は、安楽寿院に寄進され、佐陀荘が成立するが、講武平野も西半はこの荘園に含まれていたようである。また、南北朝期から戦国期にかけての戦乱に際し、この一帯にも多くの山城が築かれており、殿山、海老山、大勝間山、芦山、池平城跡など相当の規模をもつものも知られているが、その築城の時期および存続期間、城主など不明のものが多い。



図2 名分塚田遺跡と周辺の遺跡(1 / 50000)

- 1.名分塚田遺跡 2.佐太講武貝塚 3.古浦砂丘遺跡 4.志谷奥遺跡 5.佐太前遺跡 6.奥才古墳群 7.鶴瀬山古墳群 8.名分丸山古墳群 9.向山、荒神古墳 10.岩屋古墳 11.講武条里制遺構 12.殿山城 13.海老山城
14.芦山城 15.大勝間山城 16.池平城

III. 調査の概要

名分塚田遺跡は、講武川が形成する沖積平野の西端近くで、講武平野の西を限るように位置する鶴灘山の南麓に所在している。周辺は海拔高4.0~4.5mの水田となっている。

この水田に12.5×2mの調査区を2ヶ所設定し、発掘調査を実施した。この調査の結果いかんによっては、さらに調査面積を拡大した調査を行う可能性も考えられたため、両調査区は国土座標にとりつくようにして将来にそなえた。

調査区は東にあるものから第1、第2調査区と呼称した。当初は両調査区とも12.5×2mの範囲と発掘する予定であったが、まず着手した第1調査区で予想外に湧水が著しかった上に、かなりの量の遺物が下層まで包含されていることが判明したために手間どり、第2調査区は調査面積を狭めざるを得なかった。結果として、第1調査区で25m²、第2調査区で7m²を実掘し、計32m²を調査したこととなる。

両調査区とも水田耕作土の下層は、粘質土が深くまで堆積しており、以前は低湿地帯であったと考えられた。ただ、第1調査区では遺物が多く含まれる層が存在している。両調査区ともに現水田のために布設された暗渠が調査区にかかっていたために著しい湧水となった。

第1調査区では、現水田面から約1.6m、海拔高2.7mまで掘り下げた。調査面積が狭いため、明瞭な遺構面としては把握できなかったが、かなりの遺物を包含しており、層が下層になるにつれ、古い遺物を含む傾向は指摘できる。

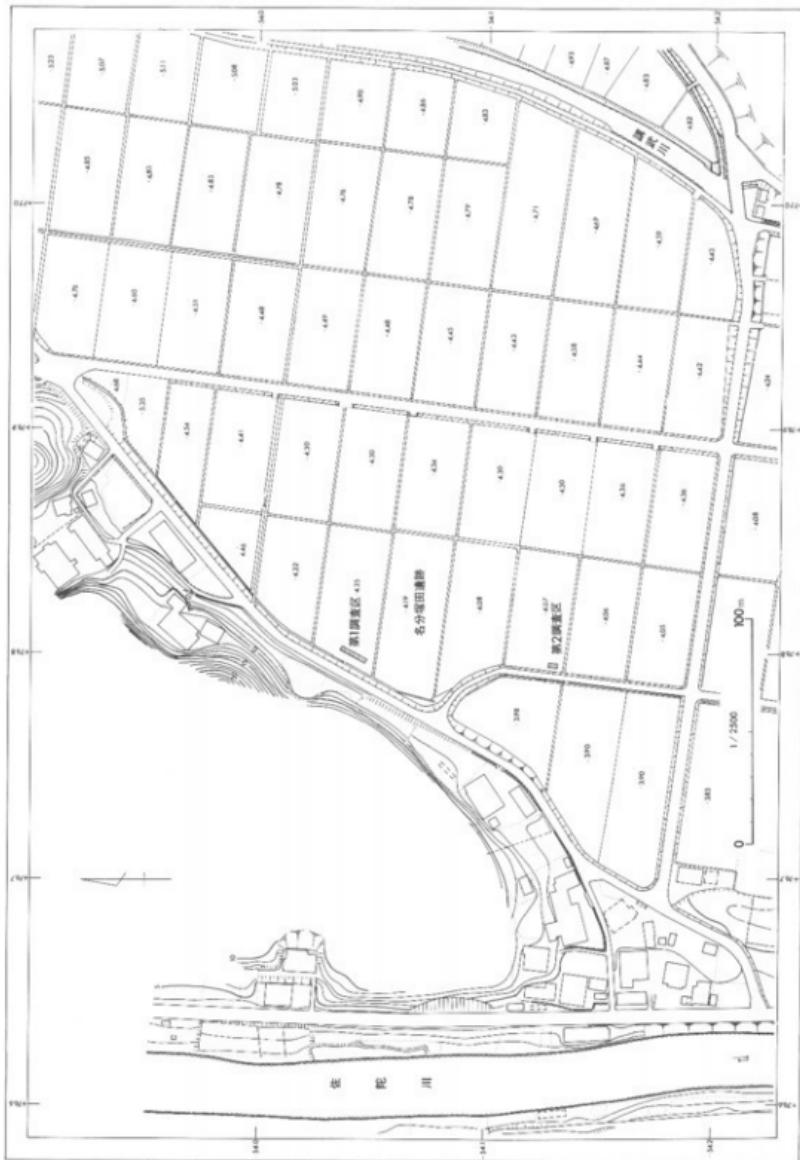
第2調査区は、現水田面でも第1調査区より0.2m低く、當時滞水状態に近い湿田である。ここでは現水田面から約1.6m、海拔高2.5mまで掘り下げた。土層はかなりグライ化が進んでおり、層序も単純で、各層は厚い。この調査区では、遺跡との関連を想定しうる程の遺物の出土はみなかった。

以上のような状況から、鶴灘山南麓縁辺部に集落があったと想像され今回の調査区付近では、畦畔等は検出できなかつたが、水田等が営まれていたものと考えられる。



写真1 発掘調査風景

図3 名分塚遺跡調査区位置図 (1/2,500)



第1調査区 この調査区は 12.5×2 mの範囲を発掘した。調査前の水田面の標高は4.25mである。この地表下約0.2mが現在の水田の耕作土で、酸化した茶系色の色調を呈している。この下層は、グライ化して青灰色を呈する粘質土で、この層には上面から断面V字状を呈する暗渠が掘りこまれている。このことから、旧水田面であった青灰色粘質土に暗渠を掘りこみ、約0.2mの土砂をかぶせて現在の水田を造成しているものと考えられた。暗渠には調査区長軸に平行するもの1本と、長軸に直交するもの2本が検出されている。これらの暗渠は、同一面から掘りこまれていながら、上下に重なっている。つまり、長軸に直交するもの2本をやや深く掘りこみ、これに重ねるように長軸に平行するものを掘りこんでいるわけである。

この下層には約0.1mの厚さで暗青灰色粘質土、約0.2mの厚さで暗褐色土が堆積している。暗褐色土はさほど粘性はなく、中世頃の遺物を多く含んでいる。

この下層に堆積していた淡褐色土はやや層厚く0.3mを測り、中世から古代の遺物を多く含んでいる。この層と上層の暗褐色土には杭が打ちこまれていた。3本が約0.1mの間隔で打ちこまれていたものと考えられるが、うち1本はすでに腐っており、杭の痕跡が空洞となって残っているのみであった。

この淡褐色土の下層にはごく薄く緑白色粘質土が堆積している。この層は南側にやや厚く、北側では消失する。この層中には緑色の

1. 耕作土
2. 青色粘質土
3. 青灰色粘質土
4. 暗青灰色粘質土
5. 暗褐色土

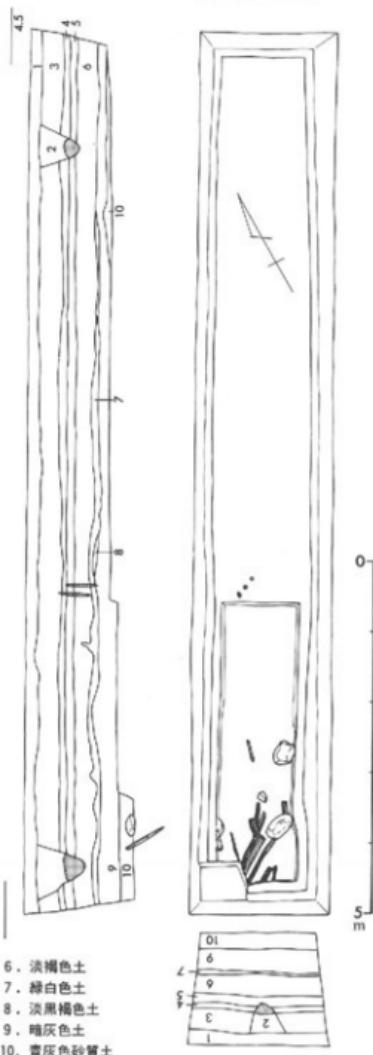


図4 第1調査区平・断面図(1 / 80)

ブロックを多く含み、南側の方がやや緑色が濃い。

この下層は暗灰色粘質土で、層厚 0.3 m を測る。この層中には古代から古墳時代の遺物を含むほか、南方下層で木片および塊石を検出した。この下層は調査区の関係から、これ以上掘り下げるには危険が伴うと判断したため、部分的に掘り下げ、青灰色の砂質土層と粘質土層が互層になっているのを確認し、青灰色砂質土層中から杭が打ちこまれていた他、塊石も認められた。

以上のように、地表下約 0.6 m から中世、古代、古墳時代の遺物を含む層が堆積しており、層毎に明瞭に区分できるわけではないが、下層になるほど古い時代の遺物が多くなる傾向は指摘できる。

暗褐色土層中の杭 この杭は、2 本が残り、1 本が腐って痕跡として残っていた。杭は暗褐色、淡褐色、緑白色土層にまたがって打ちこまれており、残存する杭は長さ約 45cm である。これらの杭は約 10cm の間隔で打たれていたと考えられるが、3 本のみの検出である。

杭 1 は、残存長 44cm、太さ約 4 cm の丸太の枝をはらい、先を尖らせたもので、刃物による切り口は鋭い。

杭 2 は、残存長 45cm、太さ約 4 cm を測る丸太であるが、刃物による切り口は鈍い。

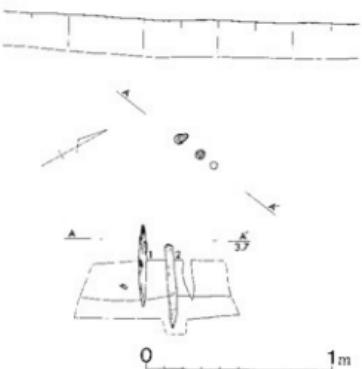


図 5 暗褐色土層中杭出土状況実測図 (1/30)

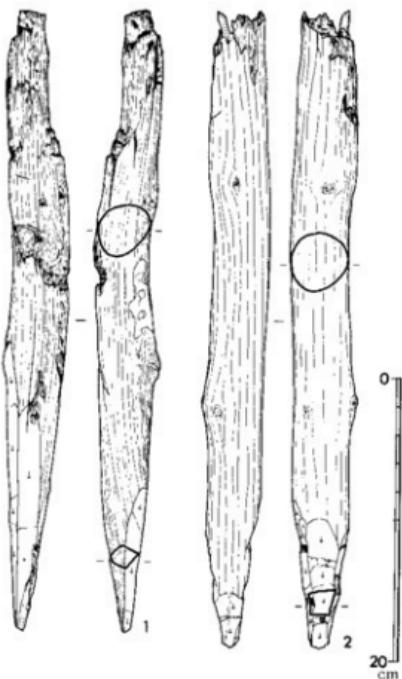


図 6 暗褐色土層中杭実測図 (1/4)

暗灰色土層以下の木片、杭 現水田面から約1m下の暗灰色粘質土層中には木片および塊石が含まれていた。このうち木片はほぼ水平な状態で検出されている。出土状態は特に規則性は認められないが、ある程度の長さをもつものは向きがそろっている。これら木片は調査区の隅にあたっており、排水用の溝で切断してしまったので、さらに長いものである。この層中にはこれら木片の他、植物遺体も認められた。この下層の青灰色砂質土層には、1本ではあるが、杭が打ちこまれていた。

また、塊石も2点認められている。杭は調査区の端であったため、1本のみの検出であつたが、丸太を四分割し、工具によって先を尖らせた痕跡をとどめるものである。青灰色砂質土層中、杭に接するようにして、土師質の土器片1が検出されている。しかし、この杭の打ちこまれていた付近に土層の乱れは認められず、この杭がどのような目的で打ちこまれたものかは明らかにできなかった。しかし、後述するようにこの杭の打ちこまれた土層は古墳時代以前のものと考えられ、その頃に何らかの形で、この付近の低湿地に対する働き

43

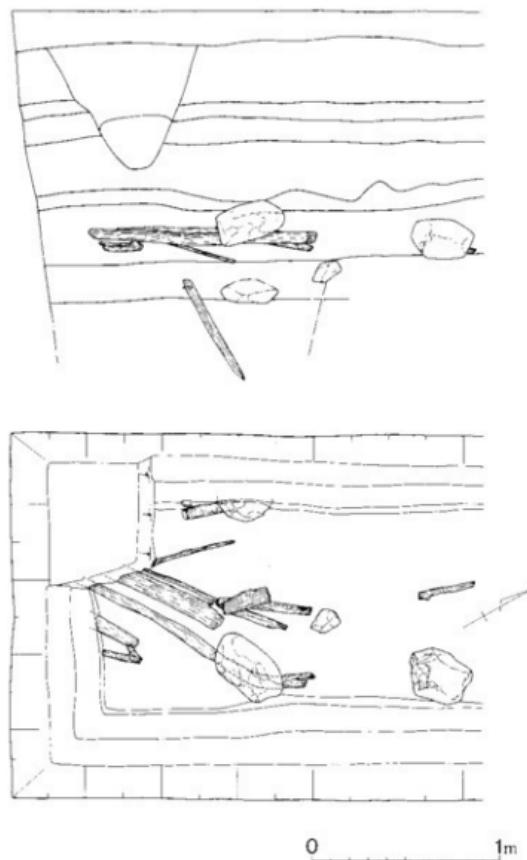


図7 暗灰色土層以下の木片・杭出土状態実測図(1 / 30)

かけがなされたものと考えられる。暗灰色土層中に集積していた木片は向きがそろっており、当初は何らかの遺構の存在も予想されたが、そういったものは認められず、沼沢地の汀線にうち寄せられたような状況と考えられる。しかし、木片のうちには、木製品の一部と考えられるものも含まれているため、付近に遺構の存在する可能性が高い。

この土層で検出された木片1は、板状のもので残存長26.2cm、幅8.3cm、厚さ0.9cmを測る。かなり腐食が進んでいるため、工具痕等はとどめず、人工のものかどうかは判然としない。しかし、厚さが均質であること、本来は長方形をしていたと考えられることから、板状のものであった可能性が強い。

木片2は、長さ61.2cm、太さ7.1cmを測る杭で、丸太を四分割したため、横断面形は扇形を呈している。先端は刃物によって尖らせ、先端部の横断面形は六角形を呈する。工具の痕跡からは鉄製の刃物であったと考えられる。残存する丸太外皮からは、四分割される以前の丸太は、太さ約10cm程度のものと考えられる。

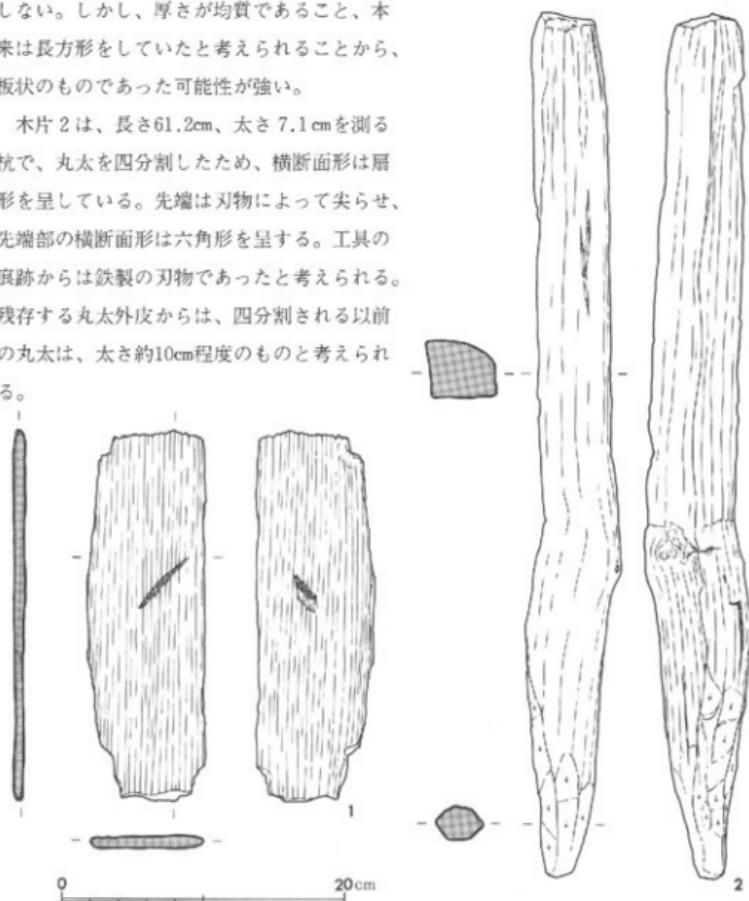


図8 暗灰色土層以下の木片・杭実測図（1/4）

第1調査区出土土器 この調査区で出土した遺物は、大半が暗褐色土、淡褐色土からの出土で、その上・下層からはわずかずつの中出土である。図示したものでは、(1)が暗青灰色粘質土、(2)～(33)が暗褐色土、(34)～(48)が淡褐色土、(49)～(51)が暗灰色土からの出土である。出土遺物は土師質土器、須恵器、土師器、石器等である。

(1)は陶器碗で、削り出し高台をもち、内面に暗緑色の釉がかかる。

(2)～(17)は土師質のカワラケ底部と考えられるもので、全体に摩滅が進んでいるが、底部調整のわかるものでは、(8)が静止糸切り痕をとどめる以外は、回転糸切り痕を有するものである。体部は内外面に回転ナデを施す。底径で4cm前後のやや小形で薄手のものと、7cm前後の大形で厚手のものの2種類があるようである。(18)～(20)は、高台を有する杯である。(21)は高杯の一部と考えられるものである。(22)～(27)は脚付の杯で、全形がわかるものはないが、(24)のみが杯部片で、他はいずれも脚部である。脚下面の調整は、(22)が静止糸切りで切りはなしている以外は、いずれも回転糸切りの痕跡をとどめる。脚部の径は、5cm前後のものと、7cmをこえるやや大形の(27)がある。(28)は土師器甕で、外面に布か皮様のものでなでた痕跡、内面にヘラケズリの痕跡をとどめる。

(29)～(31)は須恵器で、(30)は高台のつく杯、(29)、(31)は回転糸切りで切りはなした平底をなすものである。

(32)～(33)は石製品で、(32)は軟質なチャート質のもので、一面に剝片を割りとった面を残す。剝離した剝片は2×1.5cm程度のもの2片と考えられる。どのようなものに利用されたかはわからない。一面に原礫面をとどめている。(33)は磨石等の破片と考えられ、平坦な表裏面とも摩滅して平滑となっている。

(34)～(40)は、土師質のカワラケ底部と考えられるものである。(34)～(36)、(38)は、平底のもので、底部に回転糸切り痕をとどめる。器厚やや厚い。(37)、(39)、(40)は高台を有する杯で、(37)は径の小さいもので、(39)～(40)はやや大ぶりなものである。(40)は内外面とも著しい回転ナデ痕をとどめる。(41)は土師器甕口縁部で、単純に外反する口縁部の端部を内側に折り曲げるものである。

(42)～(48)は須恵器杯片で、(42)～(46)は底部回転糸切りで切りはなした平底をなすものである。(47)は高台を有するもの、(48)は立ち上がりを有する杯身である。

(49)～(51)は、土師器および弥生土器で、(49)は複合口縁を有する甕片で、こういった器種ではやや退化したもの、(50)は、高杯脚部片で、直線的に聞く脚部に円形の透しをもつ。杯部と脚部は特徴的な接合痕をとどめる。(51)は、弥生土器の甕口縁片で、

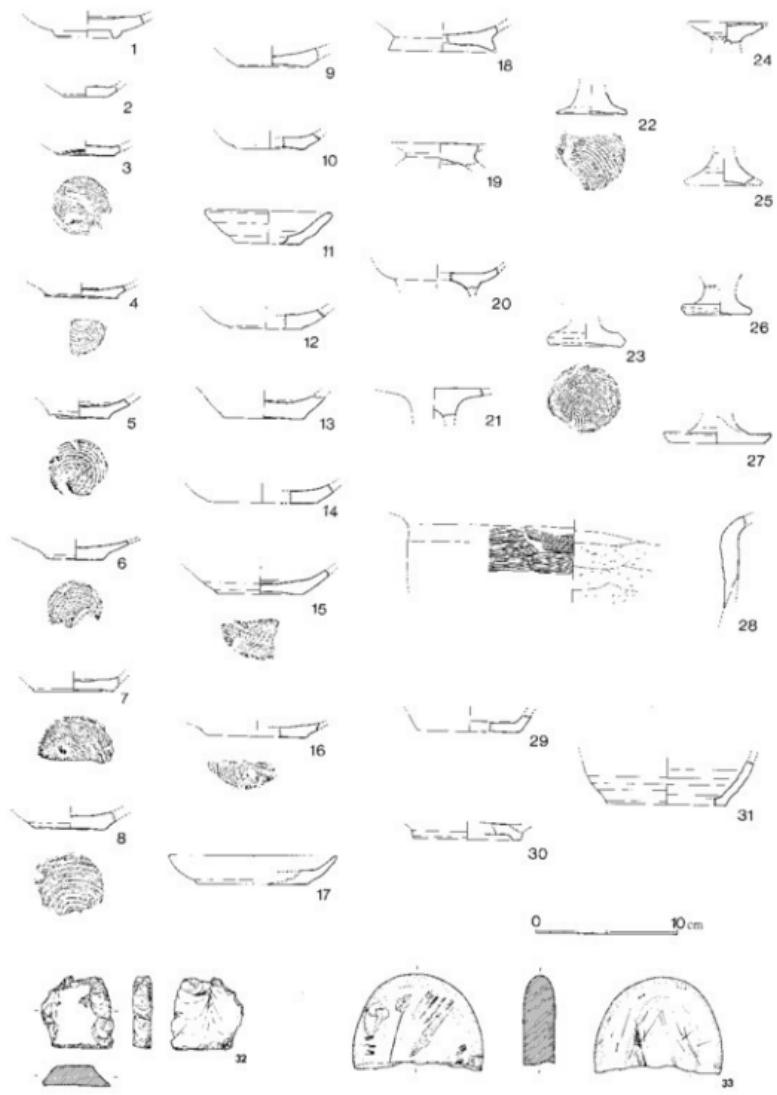


図9 第1調査区出土遺物実測図（1）（1/4、32、33は1/3）

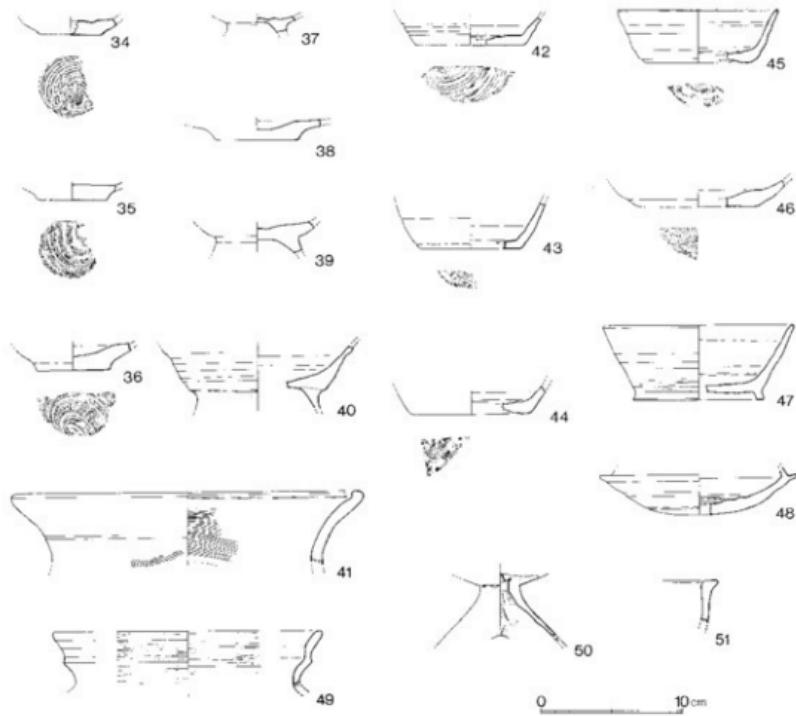


図10 第1調査区出土遺物実測図(2) (1/4)

外方に折りまげ、上面を平坦にするものである。

以上の遺物は、その出土した層位によっておおまかな変遷をたどれるようである。つまり、暗褐色土層から出土した土師質上器片は、鎌倉時代初頭頃のものと¹³考えられ、その層中には須恵器が著しく少ないとここのことを傍証するものといえよう。淡褐色土層では逆に土師質上器が減少し、須恵器がかなり増加する。これら須恵器は、柳浦編年第4・5式で、平安時代前半のものを主とし、一部に古墳時代のものを混える。暗灰色土層から出土した土器はわずかだが、土師器は古墳時代前期から中期にかけてのもの、弥生土器は1片のみの検出であるが、中期頃のものであろう。

この調査区では、暗褐色土層で中世、淡褐色土層で古代、それ以下の層で古墳、弥生時代の包含層を認めることができたことになる。

第2調査区 この調査区では当初、第1調査区と同じく $12.5 \times 2\text{ m}$ の範囲を発掘する予定であったが、第1調査区で多くの遺物が検出され、湧水も著しく手間どったため、調査面積を縮小せざるをえず、 $3.5 \times 2\text{ m}$ の範囲を発掘するにとどめた。

調査前の水田の標高は 4.05 m で、この地表下約 0.2 m が現在の水田の耕作土であるが、酸化して茶系色の色調を呈するのは地表から約 0.1 m にすぎない。その下層はグライ化して青灰色を呈する粘質土である。現在の耕作土下面から断面V字状を呈する暗渠が掘りこまれている。この状況は、第1調査区と同様で、旧水田面であった暗灰色粘質土に暗渠を掘りこみ、約 0.2 m の土砂をかぶせて現在の水田面としていることがわかる。暗渠は調査区を横断するように1本が検出されている。

現在の耕作土の下層は、約 0.4 m の厚さで暗灰色粘質土、約 0.7 m の厚さで淡褐色粘質土が堆積している。その下層は明青灰色粘質土となる。この調査区では各層とも著しく粘性度高く、湧水も著しい。これ以下の調査も考えたが、調査区壁が崩落をはじめ、隣接する農道にまで及ぶおそれが生じたため、急ぎ実測図を作製し、埋め戻した。この調査区を遺物の多く出土した第1調査区と較べると、土層層厚がかなり厚く、層序も単純である。木杭なども検出されなかった他、出土遺物もごくわずかであった。

この調査区で検出された遺物は、土器細片3片にすぎない。(52)は須恵器杯と考えられるもの、(53)は須恵質の壺片で、外面には格子状のタタキメを残し、内面はタテ方向のハケメをとどめるものである。

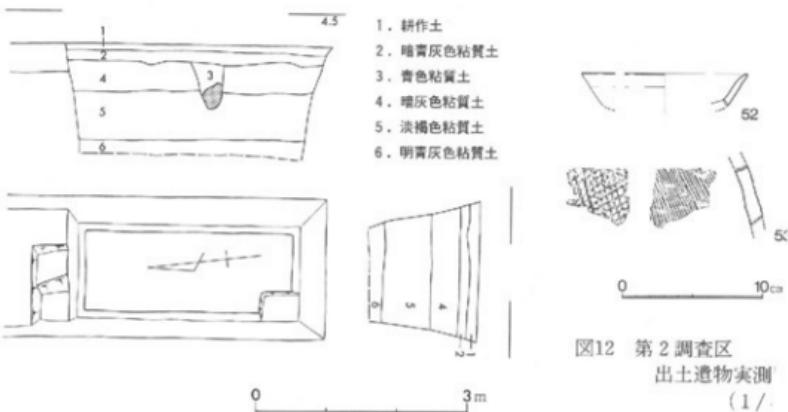


図11 第2調査区平・断面図 (1/80)

図12 第2調査区
出土遺物実測
(1/

IV. 周辺の遺跡

佐太前遺跡

名分塚田遺跡の南方約400mの佐太橋周辺は佐太前遺跡として知られている。この付近から弥生土器が出土することは、第2次大戦前から知られており、戦後、佐太神社宮司であった朝山皓氏と山本清氏によって採集され、遺跡は佐太橋の東西にまたがるものであることがわかっている。この遺跡は江戸時代(天明年間)における佐陀川の開削により、河川の部分は包含層が掘りおこされたものと考えられる。その際の土砂は川の東西に積まれ、特に東側では、土手状の堆積をみせ、この揚土中には多くの遺物を含んでいる。採集されている遺物は、弥生時代前期の弥生土器から奈良、平安時代の須恵器などの土器の他、石斧、石鎌、石環などの石製品も認められる。今回は、現在佐太神社で保管されているものと、町教委で保管しているものを紹介する。

これらのうち弥生時代前期のものは、壺、甕、蓋がある。前期前半にまでさかのぼりうるものは認められないが、壺、甕ともに口縁下端に段を有するものがある。これらは内外面を著しくヘラミガキするものである。その他壺では肩部に突帯をもうけたり(4)、羽状文を施すもの(4・5)がある。甕では、口縁下にヘラによる沈線を施すもの(3・6)があり、(3)は口縁端部にヘラ沈線を1条施したのち、工具を押圧して列点文を描いている。(7)はやはり甕片だが、わずかに外反する口縁の下にクシ状工具による平行線文を入れている。蓋は小ぶりだが大きく開くもの(8)と、大ぶりなもの(9)がある。土器底部には、外面にハケメを施すものとヘラミガキで仕上げるものと2種がある。

弥生時代中期のものは、壺しか図示しえないが、やや外反し、平坦面をなす端部に格子文を施し、外面に列点文、櫛描き波状文を描くもの(16)がある。その他大きく外反する口縁端部を上下にひき出し、その平坦面に凹線文を施すもの(18・19)がある。また、頭部から胴部の破片で胴部外面にヘラで沈線を7条描くもの(17)がある。

弥生後期前半のものでは、太くわずかに外反する口縁部をもち、その端部に3条の凹線を施すもの(20)、単純に外反し、その端部に1~3条の凹線を描くもの(21~23)がある。後期後半のものには、複合口縁の甕および鼓形器台がある。甕には口縁外面に凹線や櫛描平行線文をもつもの(24・26)と無文のもの(28)がある。鼓形器台(25)は無文のものである。

以下はいずれも須恵器である。(29)は高杯で脚に透しをもつ。(30~32)は高台をもつ杯で、(33)は糸切りで切りはなす杯である。(29)は古墳時代後期後半、(30~33)

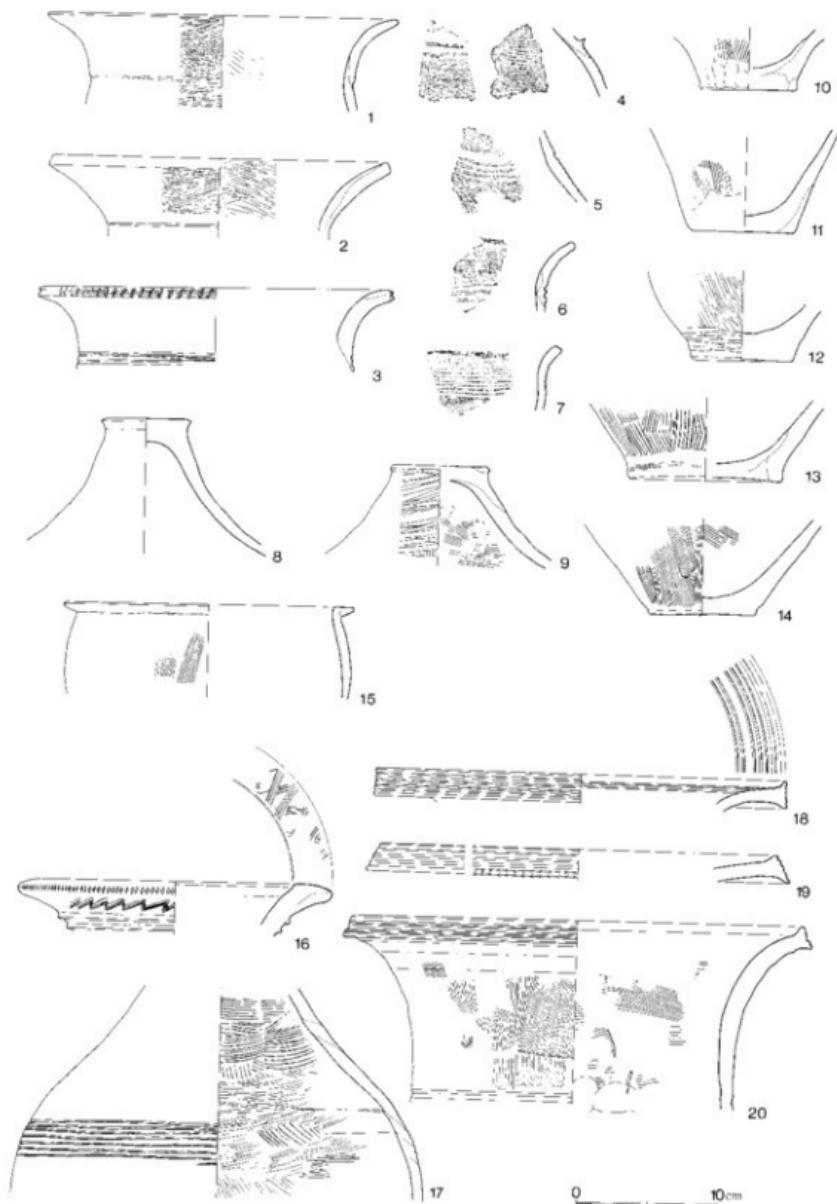


図13 佐太前遺跡出土土器実測図（1）（1/4）

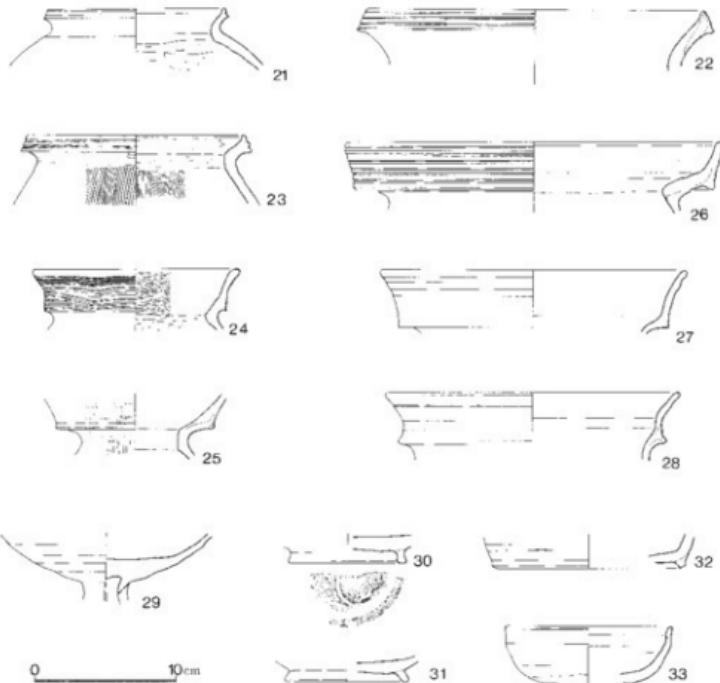


図14 佐太前遺跡出土土器実測図（2）（1/4）

は柳浦編年第3～4式³⁴で奈良・平安時代のものと考えられる。

以上みてきた遺物から、佐太前遺跡の時期を考えると、少なくとも弥生時代前期後半に人々の生活が始まり、それは弥生時代後期頃までは続くものと考えられる。今までのところ、古墳時代前期および中期の遺物が見あたらず、この期間、この集落が廃絶するのか、あるいはたまたま採集品がないのかは現状では判断することはできない。古墳時代後期以降、奈良、平安時代頃までは人々の生活があったことは遺物の示すとおりである。

いずれにせよ、遺物の採集地点がかなりの広がりをみせ、遺物もかなりの期間にわたってはいるものの、一期間集落の断絶する可能性をもっていることは、佐太前遺跡という集落の消長、盛衰があることを暗示しているのかも知れない。

V. 文献からみた中世の名分地域について

遠藤 浩巳

はじめに

鹿島町には中世の遺跡として、城跡を中心として経塚・古墓などが多く知られている。城跡としては、殿山城跡・松尾山城・海老山城など多数あり、最近の発掘調査でも氏穴遺跡についての調査がおこなわれている。また御津経塚や「伝朝山越前守墓」として著名な五輪塔などがある。このように発掘調査等により、鹿島町の中世の歴史像が徐々にではあるが明らかにされつつある。

一方、文献史学の分野では史料の制約等のため、十分な研究がなされていないといえよう。しかしながらも、鹿島町についていえば比較的史料の多い、佐太神社文書・朝山文書、隣接する松江市荘或町の成相寺文書等があり、県内の他地域に比べれば恵まれている。

ここでは、現在の名分地域が中世においては佐陀荘内にあたることから、佐陀荘を中心概観してみたいと思う。

1. 佐陀荘について

中世における名分地域は、佐陀神社の支配する佐陀荘の中に含まれ、佐陀神社の政治的経済的な支配下におかれていたと思われる。「佐陀荘」としての初見史料は平安末期と推定される「庄々所済日記」（安楽寿院文書）であり、これによれば佐陀神社は安楽寿院の末社の1つとしてみえ、躉200枚などを負担している。佐陀神社とその周辺地域が安楽寿院に寄進されて末社となり、佐陀荘と呼ばれるようになったと思われる。また康治2（1143年）8月19日の「太政官牒案」（安楽寿院文書）によれば、安楽寿院の末社の1つとして「佐陀社」が見られ、「在出雲国秋鹿郡惠積郷並鳴根郡西條生馬郷内」「件両社者、領知之輩等、且為断後代、且為省當時之煩、寄進一院序舉、仍以彼所当之地利、所寛此院家之用途也矣」とあり、古代末から中世初期の佐陀荘は秋鹿郡・惠積郷と島根郡西条生馬郷を含む地域を占めていたことがわかる。さらに永萬元年（1165年）6月の「神祇官諸社年貢注文」によれば出雲国には「杵築社米」「佐陀社米卅石」とあり、佐陀神社が中央政府の神祇官に米30石を納入していたことがわかる。この理由としては、当時の佐陀神社が出雲一宮杵築大社に次ぐ地位（出雲国二宮）であったことによるもので、佐陀神社が大きな政治的・経済的な力をもっていたことが窺える。

中世にはいり、鎌倉初期の建保2（1214年）7月25日付「神祇官下文」（朝山文書）に佐陀御領の下司職に勝部四郎丸（朝山氏）を補任するとあるのが中世においては初見史

料である。文永8（1271）年11月の「関東御教書」（千家文書）には「杵築大社三月会相撲舞結番」の第9番として「二百八十丁三頭佐陀庄、佐陀神社」とある。また嘉元4（1306）年の「昭慶門院御領目録」によると、安楽寺院領の一つとして「出雲国佐陀神宮寺盛永、佐陀社（佐陀莊）支配の預所として「盛永」なる人物の名が記されている。全国的な動向であるが、このころから各荘園において、預所など強力で直接的な荘園管理方式と荘官組織が多くなるように、この中世佐陀莊も同様で、佐陀神社神主が佐陀莊地頭として荘園制支配の実務にあたり、本家安楽寺院は預所を補任してその監督にあたるという支配構造をとるに至ったものと考えられる。

戦国期になると、当莊は秋鹿・島根両郡にまたがっていたことから、それぞれを「秋鹿分」「島根分」と称したようである。永禄7（1564）年5月24日の「成相寺領書立」（成相寺文書）に「佐陀庄秋鹿分」「同社島根分」「同庄島根分」などとみえている。戦国末期になると、永禄・天正年間（1558～1592）には尼子氏滅亡の後、この地域に勢力を張った毛利氏の支配下に置かれ、毛利氏家臣による所領分割が進行し、荘園としての統一を失っていったようである。

2 佐陀神社と成相寺

成相寺は現在松江市莊成町に所在し、行基の開基と伝える古刹である。この成相寺は中世後期になると佐陀神社と関係を強め、佐陀神社の神宮寺として存在するようになる。ここでは名分周辺の歴史的環境を成相寺文書を中心に考察してみたい。史料上では中世後期になりその様子が窺えるわけだが、初見史料は至徳2（1385）年4月27日の「御教書」（成相寺文書）である。これによれば河野信益に「成相寺地頭職」が安堵されている。詳細はわからないが、成相寺には12の坊が存在したと言われるように、成相寺を中心とする寺領は相当広いものであったと思われる。応永3（1396）年2月9日の律師秀実の「成相寺置文」によると、承久年中（1219～1222）まで庄村一円を領有していたが、「本寺末寺依公事之子細」により寺家が断続したことがわかる。そして成相寺は応永年間（1394～1428）に京極氏の祈願所となり、秀実は寺家を再興し、京極高詮は庄村内で三昧田1反大を寄付し、経米1石2斗を藏米から出している。

さて、成相寺と佐陀神社が関係を強めるのは中世後期、特に戦国期のようである。永正7（1510）年3月16日の「井上隼人・井上掃部助兩人賣券」によれば、佐陀神社の神官と思われる井上隼人・井上掃部助兩人は佐陀莊内小林名之内の「島根方五りうへ田」を代銭6貫文で成相寺に水代賣渡している。その中で「神事等御無沙汰有間敷候」とあるように、成相寺に対し佐陀神社の社役を勤めるように述べている。同様に同年12月14日に両

人は同じ小林名内の涅槃田を成相寺に対し米15俵で永代賣渡している。その後も佐陀神社神宮による土地の賣渡しが成相寺に対しておこなわれている。このような土地売買の動きは全国的にみられる動向であるが、佐陀神社の所領支配に着目してみれば、中世後期に至り社家朝山氏の求心的な所領支配がしだいに崩れ、神宮にしだいに分割され經營がなされるようになったと考えられる。それが戦国期に至り、貨幣経済の浸透等により売買を余儀なくされていったと思われる。一方戦国期に戦国大名尼子氏や毛利氏の祈祷所として勢力を伸ばしていく成相寺は、坊領を中心に地主的に所領を集積していくと考えられる。

次に戦国期の佐陀神社・成相寺と比較的史料の多い尼子氏・毛利氏との関わりをみてみよう。出雲国における一国支配をめざした尼子氏は、特に杵築大社・酔臥寺に対して、自らの信仰と、膨大な所領と軍事力をもつこれらの寺社勢力に対し、積極的に懷柔策をおこなっている。このような政策が佐陀神社や成相寺に対してもおこなわれている。具体的な政策としては所領の寄進・安堵などが中心である。享禄3（1530）年4月5日に尼子興久は置文の寺領を安堵し、天文6（1537）年には尼子経久が応永3年の秀実の置文に裏書をして寺領を安堵している。永禄7（1564）年5月24日の「成相寺領書立」には成相寺が佐陀莊島根方・同秋鹿分に種々の祭田を領していることがわかり、毛利氏もこれららの寺領を安堵している。

最後に「名分」という地名について考察を加えておきたい。戦国期までは史料上「佐陀庄」と見えるが、戦国期には佐陀莊の「島根分」「秋鹿分」と分けられたところから、その佐陀莊が二つに分かれている地域を「名分」と呼んだと思われる。更に付け加えれば、尼子氏の支配下では「佐陀庄」という語は使われるが、毛利氏の支配下になると「佐陀之内、朝山分」あるいは「佐田村」と表記されるようになり、この時点で「名分」という地名が生まれたのかもしれない。

終わりに

以上不十分ではあるが、佐陀莊あるいは佐陀神社と成相寺との関係について概観してみた。史料分析等不十分な点は多くあるが、今後は佐陀神社神主朝山氏、あるいは所領支配を中心に研究を進めていかなければならないと思う。

〈参考文献〉『新修島根県史』通史篇1 1968年

『八束郡誌』 1926年

『鹿島町史料』 1976年

VII. 小 結

名分塚田遺跡はわずかな面積を調査したにすぎないが、今回の調査で明らかにできたことと、今後に残された課題を記して小結としたい。

この遺跡は、講武平野の西端近く、標高約4mの水田中に位置している。周辺には前述した佐太前遺跡や須恵器の散布する箇所も知られている他、この付近の水田は条里制遺構が存在する可能性のある所として知られている。

調査を実施した第1、第2調査区の様相をみると、第2調査区では遺物は殆ど認められず、特に遺構が存在することを推測させる材料はなかった。しかし、第1調査区では、かなりの量の遺物が検出された上、上下2層で杭の打ちこまれた面があり、水田等の遺構の存在するものと考えられる。

第1調査区で出土した遺物は、鎌倉時代初頭頃から弥生時代にさかのぼりうるもので、かなりの時期にわたっている。上層で検出された杭は、鎌倉時代初頭頃の遺物を多く含む層に打ちこまれており、この遺物の示す時期よりも後に打たれたものと考えられる。この遺物は、現代の水田と道路をはさんで上面の鶴瀧山南麓平坦面に所在することが推測できる当時の集落から廃棄されたり、水田面に造成土として流しこまれたものと考えられる。下層の杭は、わずかだが古墳時代から弥生時代の遺物を含む暗灰色土層より下層の青灰色粘質土層中に上端を出すように打ちこまれており、この層位から杭は弥生時代にさかのぼるものである可能性がある。この杭の打ちこまれた層の上層である暗灰色土層中には、汀線に打ちよせられたような状態で木片が検出されている上、一抱えもあるような塊石も出土しており、この杭は水田等の遺構に伴うものとは考えられない。杭の打ちこまれる層が砂層と粘質土の薄い互層となっていることもこのことを補強し、おそらくは、沼沢地の縁辺部汀線を湿田として開発する際に残されたものであろう。この知見から弥生時代頃に講武平野のこの周辺の水田としての開発が始められたと考えられる。当時の水田は土層でみる限り、著しい湿田であったと思われ、砂質土や粘質土の互層になっていることが示すように度々冠水するもので、生産力もさほど高いものではなかったとは考えられない。しかし、中世以降の水田と考えられる暗褐色土層では、かなり改善されており、中世に「佐陀荘」として文献にみえる水田がこの層か、この上下の層に相当するものと考えられる。また、暗褐色土層以下の淡褐色、暗灰色土層では杭など遺構を推測させるものはなかったが、古墳時代から古代にかけての水田等の遺構が存在する可能性も考えられる。これらの層には砂層などの間層を含まず、比較的安定した水田であったものようである。このことは、遺構

としての水田の発見は困難を伴うことを示すものであろうが、調査区を拡大して水路、杭列等が発見できれば、当時の水田の実態について考える具体的な材料を得ることは可能であろう。

この周辺は『出雲国風土記』では島根郡生馬郷に含まれるものと考えられ、朝山崎、加藤義成の両氏は、生馬郷郷庁がこの遺跡周辺の稻置^{いなし}あたりにあったものと推測されている。しかし、当時の郷庁が実在したかどうかは疑問であり、実在したとしても当時の豪族の屋敷の一部にすぎなかったと思われ、特に役所としての建物はなかったと考えられる。今回の調査地点での出土遺物は、全くの日常雑器ばかりで「郷庁」はおろか、豪族の屋敷等が周辺に存在することを推測させるものはない。さらに周辺での調査にまたなければならないだろう。

また、講武平野においては条里制の遺構が残っていることは、古くから指摘があり、特に講武平野の中心部では、中沢四郎氏による研究成果^著があるが、この名分塚田遺跡の所在する付近については、中沢氏は条里制の及んでいる可能性を指摘するにとどめられており、確言はなされていない。今回は、調査面積も狭く、その範囲内では条里制の有無の判断は困難であったが、条里制が施かれた頃の遺物の出土もみており、講武平野中央で条里制の土木工事が行われている頃にこの付近でも水田が営まれていることは、条里がこの付近にも及んでいることを推測させる。

この付近の中世の様相については、すでに第V章で紹介していただいたので重複を避けるが、鎌倉時代初頭以降のものと考えた暗褐色土層中の杭は、佐太神社の莊園であった佐陀莊の水田に打ちこまれたものであったかもしれない。

今回の調査では、周辺の佐太前遺跡とともに、講武平野を現在の水田とするために約2000年もの昔から營々と努力が積み重ねられてきたことを明らかにするいとぐちを得たものと考えるが、さらに周辺の調査にまたねばならないことを記して、小結とする。

- 注1. 山本清「佐太講武貝塚」（『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年）
2. 金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」（『日本考古学年報』16 1963年）
金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の顔蓋」（『人類学雑誌』第69巻3・4号 1962年）
3. 「志谷奥遺跡」鹿島町教育委員会 1976年
4. 山本清「佐太前遺跡」（『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年）
5. 「奥才古墳群」鹿島町教育委員会 1985年
6. 「菅田考古」16 島根大学考古学研究会 1983年
7. 「名分丸山古墳群測量調査報告書」鹿島町教育委員会 1984年
8. 「鹿島の遺跡小集」鹿島町教育委員会 1979年
9. 同上
10. 「菅田考古」15 島根大学考古学研究会 1979年
11. 加藤義成『校注出雲國風土記』1965年
12. 中澤四郎「講武村條里の研究」（『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年）
13. 出土遺物の時期については、三宅博士、広江耕史の両氏からご教示をいただいた。両氏の調査された大溝谷遺跡から、本遺跡と同様な土師質土器が出土しており、それにともなう中国陶磁から年代を比定できるという。
14. 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」（『松江考古』3 1980年）
15. 注4書。および、山本清「さだまえいせき」（『島根県大百科辞典』山陰中央新報社 1982年）
16. 注8書
17. 「氏穴遺跡発掘調査概報」鹿島町教育委員会 1983年
18. 佐陀莊については『角川日本地名大辞典 島根県』（角川書店 1978年）、『島根県大百科辞典』（山陰中央新報社 1982年）に詳しい。
19. 末社については今日使われる意味とは異なる。黒田俊雄氏によれば、「今日では同一宗派の末端の寺院（神社）の寺格の意味に理解されているが、かつてはそうした教義上の意味ではなく、端的にいえば一種の財産であった。」（『寺社勢力—もう一つの中世社会—』岩波新書 1980年）とされている。
20. 現在の出雲大社。中世においては史料上「杵築大社」とみえる。
21. この史料は中世前期の出雲国在地領主を示す史料として貴重なものである。この史料から当時の寺院・神社は武力をもつ在地領主的な存在であったと考えられる。また史料中には鹿島町域の在地領主として「多久郷三十六丁七反大中二郎入道」の名がみられる。
22. 代表的な研究として、米原正義氏の『出雲尼子一族』（新人物往来社 1981年）がある。
23. 朝山皓「餘戸の里」（『講武村誌』講武村誌刊行会 1955年）
加藤義成『修訂出雲國風土記考究』（今井書店 1981年）
24. 注12書

土器観察表 名分塚田遺跡(図9)

持因番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		口径	底杯	器高					
1	碗(陶器)	—	4.2	—	胸部。削り出しの高台をもつ碗。内面に薄緑色の稚葉がかかる。	淡青灰褐色 稚葉/暗緑色	緻密	良好	
2	小豆(土師質)	—	3.2	—	底部。回転糸切りで切り離す。	赤褐色	砂質	甘い	
3		—	4.1	—	底部。内面回転ナデ。底部回転糸切り	淡青褐色	石英をわずかに含む	良好	
4		—	5.0	—	底部。内面回転ナデ。底部回転糸切りの系太い。	赤褐色	石英な微細なもの含むが密	普通	
5		—	4.3	—		淡赤褐色	石英、長石を含みやや砂質		
6		—	4.0	—		赤褐色		不良	
7		—	5.6	—		外面/黄褐色 内面/暗灰色	石英・長石の微細なもの含む	普通	
8		—	5.0	—	内面回転ナデ。底部静止糸切り	淡褐色	長石の砂粒多く、全体に砂質	やや不良	
9		—	5.0	—	底部回転糸切り	灰褐色	密	普通	
10		—	4.8	—	調整不明	淡灰色	微砂粒を多く含む	やや不良	
11		—	1.6	2.3		明赤褐色	約1mm前後の砂粒目立つ		
12		—	5.0	—		暗赤褐色			
13		—	5.6	—	内面回転ナデ。底部回転糸切り	外面/淡赤褐色 内面/黄褐色	約1mm程度の砂粒を少々含む		
14		—	(7.6)	—	内面回転ナデ。のら不定方向のナデ	外面/淡赤褐色 内面/淡青褐色		やや良	
15		—	6.0	—	内面回転ナデ。底部回転糸切り	黄褐色	微細な石英多い。 スリップ塗布	普通	
16		—	7.1	—	底部回転糸切り	淡黄褐色	緻密	やや不良	
17		—	7.8	—	調整不明	赤褐色	約2mm以上の砂粒を含む	不良	
18	高台付杯	—	7.6	—		淡黃褐色	長石・石英の砂粒多い。		
19		—	—	—		明赤褐色	微砂粒を多く含む	やや不良	
20		—	—	—		淡黃褐色	緻密だが、細かい砂粒も少量含む		
21	高杯	—	—	—			細かい砂粒が多い	普通	
22	脚付杯	—	4.9	—	外面ヨコナデ。底部静止糸切り	黄褐色			
23		—	5.2	—	外面ヨコナデ。底部回転糸切り	灰白色		普通、底面外側一部に黒斑	
24		—	—	—	内外面ヨコナデ。	淡灰褐色	微細な砂粒多い。 スリップ塗布	普通	
25		—	—	—		淡褐色	砂質		
26	脚付杯	—	4.5	—	外面ヨコナデ。底部回転糸切り	肌色	長石の砂粒や日々立つ	やや不良	
27		—	7.6	—		淡茶褐色			
28	甌	—	—	—	外面齊縁のものでな。内面ヨコナデ、ヘラケズリ	淡黃褐色	石英目立つ	普通	係施室 外面ス付者
29	杯(須志器)	—	(7)	—	調整不明	灰色	微砂粒含む	やや不良	
30		—	(7.6)	—	高台をもつ。調整不明	淡灰色	緻密		
31		—	(8.4)	—	内外面回転ナデ。底部回転糸切り	淡灰色。外面上部は黒色		良好	

名分塚田遺跡(図10)

推定番号	器種	法 異 (cm)			形態・手法の特徴	色 調	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	高さ					
34	小皿 (土師質)	—	4.4	—	内外面ヨコナデ。底部回転糸切り	淡黄褐色	約1mm程度の砂粒を含む	やや不良	
35		—	4.8	—	底部回転糸切り	淡赤褐色	約0.5mm程度の砂粒をごく小量含む		
36		—	5.1	—	内外面ヨコナデ。底部回転糸切り	外面/淡赤褐色 内面/黒褐色	微細	普通	
37	高台付杯	—	—	—	内外面ヨコナデ	外面/灰褐色 一部灰黑色 内面/灰褐色	細かい砂粒を多く含む		
38	杯	—	5.6	—	調整不明	赤褐色	微細	やや不良	
39	高台付杯	—	—	—	内外面ヨコナデ	淡褐色土	約1mm程度の砂粒をごく少量含む		
40		—	—	—		外面/淡赤褐色 内面/黄褐色	長石・石英など多く、砂質	普通	
41	甕	(25)	—	—	外面ヨコナデ、内面横方向のハケメ。口縁端部を内側に折り曲げる。	淡褐色			
42	杯 (須恵器)	—	7.6	—	内外面回転ナデ、底部回転糸切り	淡灰色	微細	やや不良	
43		—	6.8	—		淡灰色		良好	
44		—	8.1	—					
45		—	7.2	—		淡灰色、口縁外 面の一部、淡黑 灰色		やや不良	
46		—	8.2	—		淡灰色	ごく少量砂粒を含む	良好	
47	高台付杯	13.5	9.2	5.3	高台から直線的に立ち上がる体 部をもつ。体部内外面回転ナデ。 内面造立ナデ調整。外面部回 転糸切りか	外面/淡褐色 内面/暗青灰色	長石の砂粒目立つ 且外面部 間に著しい灰被り		
48	杯身	—	—	—	低い立ち上がりをもつ。内外面 回転ナデ。	淡灰色	密	良好	
49	甕 (土師器)	(19)	—	—	粗かい複合口縁をもつ。内外面 強いヨコナデ。	暗茶褐色	石英・長石などや や多い。	良好	
50		—	—	—	大きいく「フ」の字に聞く脚部。 穿孔を有する	淡褐色	石英・長石・雲母 などを含む	やや不良	
51	甕	—	—	—	外生上肩型口縁。還転外方に折 り曲げる。調整不明		約2~3mm程度の 砂質が混じる		

名分塚田遺跡(図12)

52	杯 (須恵器)	(11.8)	—	—	比較的浅い杯。	灰褐色。口縁内外 面は黒色	砂質	やや不良	
53	甕	—	—	—	外面格子状のタタキメ、内面ハ テハケ	灰白色	密	良好、整 健	

佐太前遺跡(図13)

探査番号	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
		上径	底径	高さ					
1	壺	24.7	—	—	外反する口縁部。外面に段をもつ。内外面にヘラミガキ	外面/暗赤褐色 内面/淡褐色	石英・長石の大粒のもの(Φ3~4mm)目立つ	普通	
2		23.4	—	—	端部平坦面をなす	赤味を帯びた灰色	石英・長石の大粒のもの(Φ3~4mm)含むが限る	良好	
3	甕	24.9	—	—	外反する口縁部。口縁部にへら沈線の3条から4条。外底に3条以上のへら沈線。	淡褐色	石英・長石の大粒のもの(Φ2~3mm)目立つ		
4		—	—	—	肩部破片。側面貼付の安帶をもつ。表情以下は貝殻刷突による羽状文をもつ。内面ハケメ	褐色		良好	
5	甕	—	—	—	肩部破片。太い凹線の下に3条の沈線と貝殻刷突による羽状文	乳白色	砂質	不良	
6		—	—	—	口縁部。外面に2条のへら沈線。以下ハケメ	灰白色	石英・長石など(Φ2mm前後)のもの含む	良好	
7	—	—	—	—	やや外反する口縁部。外面にケシ状工具による7条の平行線をもつ	赤褐色	石英・長石など多い砂質	やや不良	
8	壺	—	6.3	—	平坦な天井部から「ハ」の字に開く。	灰褐色	石英・長石など大粒のもの(Φ1~3mm)多い	普通 内面わずかに黒斑	
9		—	7.0	—	平坦な天井部から「ハ」の字に開く。内外面ヘラミガキ。一部にハケメ	黄味がかった灰褐色		良好 外面天井部に黒斑	
10	底部	—	7.0	—	平坦な底部から大きく聞く体部。外面底部強調。以上タテハケ	淡褐色		良好 外面黒斑	
11		—	7.0	—	平坦な底部から直線的に立ち上がる体部。外面タテハケ	赤褐色		普通 黒斑	
12		—	7.3	—	平坦な底部から滴垂して立ち上がる体部。外面底部付近ヨコ方向ヘラミガキ。以上タテ方向のヘラミガキ	灰褐色		普通	

佐太前遺跡(図13・14)

探査番号	器種	法 異 (cm)			形態・手法の特徴	色 質	胎 土	焼 成	備 考
		口径	底径	器高					
13	底部	—	10.8	—	大型の底部。外面タテハケ	灰褐色	石英・長石の大粒のもの(約2~3mm)含む	良好 黒斑をもつ	
14		—	7.7	—	底辺から直線的に聞く体部	淡褐灰色		良好	
15	甌	20.4	—	—	「し」字形に折り曲げる口縁部にややふくらむ体部がつづく。 外側タテハケ	淡赤褐色	石英・長石など微細なもの多い	普通	
16	甌	22.2	—	—	大きく外折する口縁部。端部平面に斜め子文。外側に2本以上の斜付突起、その上にクシ接着波状文。口縁端部に刺突による列点文	褐色	石英・長石など(約1mm以下)多い。	良好	
17		—	—	—	底部から斜面にかけての破片。外側に2条のヘラ沈線。内面ハケメを施した後、ヘラミガキ。粘土接觸可	淡褐灰色	石英・長石など大粒のもの(約2~4mm)含む		
18		29.0	—	—	大きく開く口縁部の端部上面および端部に凹線を残す。	灰白色	微細なもの多く 砂質	やや不良	
19		(30)	—	—	大きく開く口縁部の端部に4条の凹窓、その下に刺突による列点。内外面ヨコナデ	茶褐色	微細なもの含むが密	良好 埋藏 黒斑有	
20		31.6	—	—	直立気味に立ち上がる口縁部。口縁前面に3条に凹窓。底部下面に2本以上の凹窓。底部外側にタテハケ。内面にヨコハケ、指印正斜	灰褐色	石英・長石など含む	普通	
21	甌	12.4	—	—	底部から短く外反する口縁部。その端部に1条の凹窓。胴部内面ハラケズリ	灰白色	微細なもの多く、 砂質	やや不良	
22		23.6	—	—	刺鉗部から短く外反する口縁部。その端部に3条の凹窓	灰褐色		普通 口縁部に黒斑	
23		15.2	—	—	胴部から外反して口縁部に立る。その端部に2条の凹窓。口縁内外面ヨコナデ。胴部内外面タテハケ	黄白色	大粒の砂粒含む	良好	
24		14.6	—	—	複合口縁。外面に貝殻埋藏地による平行皱纹。口縁内面ヘラミガキ。胴部内面ハラケズリ		常		
25	鼓形器台	—	—	—	受部から筒部にかけての破片。 外側ヨコナデ	淡褐色	微細なもの多い	普通	
26	甌	26.8	—	—	複合口縁。口縁外側に凹窓。	灰白色	大粒の砂粒多く 砂質	不良	
27		21.6	—	—	複合口縁。奥く薄い口縁部。			良好	
28		20.8	—	—	複合口縁。突出する複合口縁から潜出する口縁部。		石英・長石が比較多い、金雲母も含む	やや不良	
29	高杯(須恵器)	—	—	—	口径大きい群部に細い脚が挿合する。脚は錐状の二方造し。	外面・黒褐色 内面・暗青褐色	石英をわずかに含む	良好	
30	杯	—	—	8.1	高台がつく杯底部。底部回転糸切り内外面回転ナデ	淡青灰色	長石の大粒のもの 目立つ	やや不良	
31		—	8.8	—	外方に開く高台をもつ杯底部。 内外面回転ナデ	青灰色	石英・長石など含むが密	普通	
32		—	13.6	—	高台から直線的に立ち上がる体部をもつ。内外面回転ナデ				
33		11.8	6.2	4.1	底部から漸次して立ち上がる体部をもつ。底部でわざかに外反する。 内外面回転ナデ			良好	

図 版

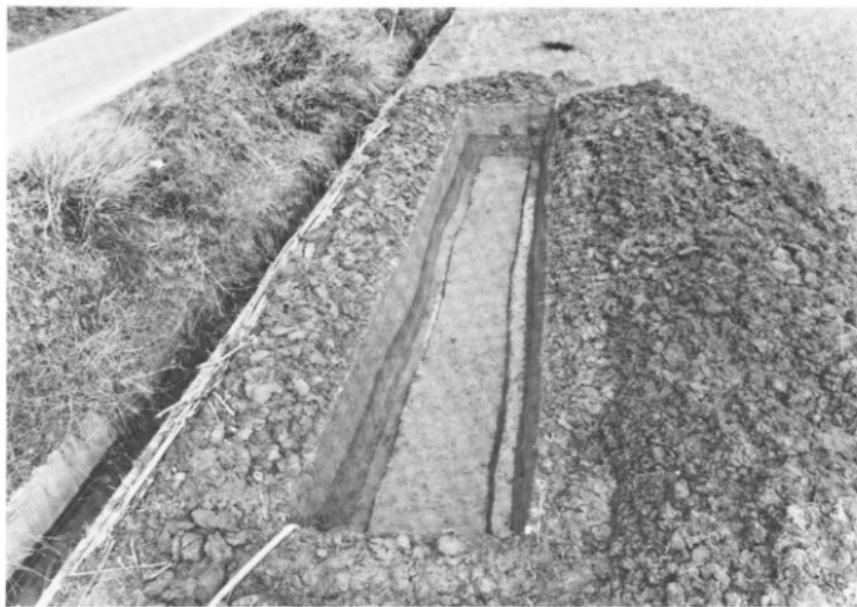


名分塚田遺跡周辺航空写真

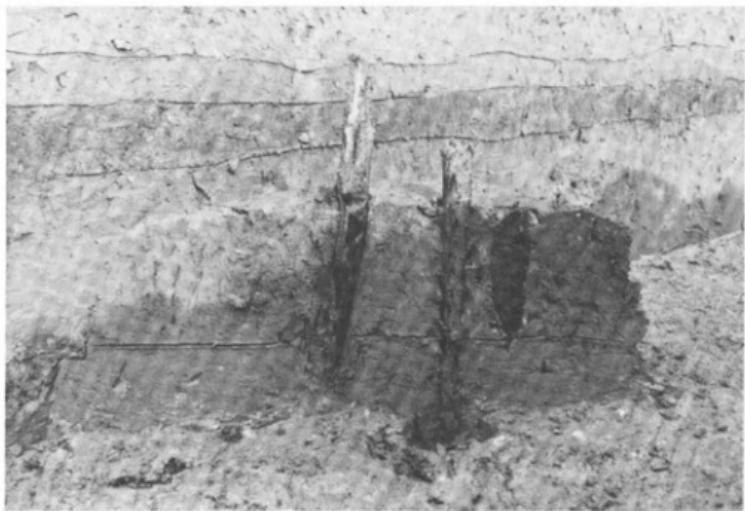


名分塚田遺跡遠景

図版 2



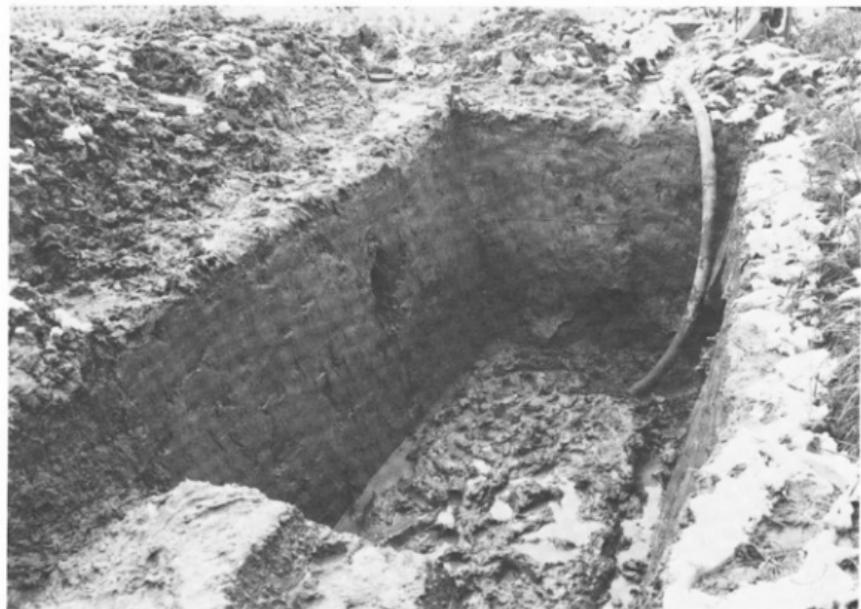
第1調査区全景



暗褐色土層中杭出土状態



暗灰色土層中の木片出土状態



第2調査区全景



6-1



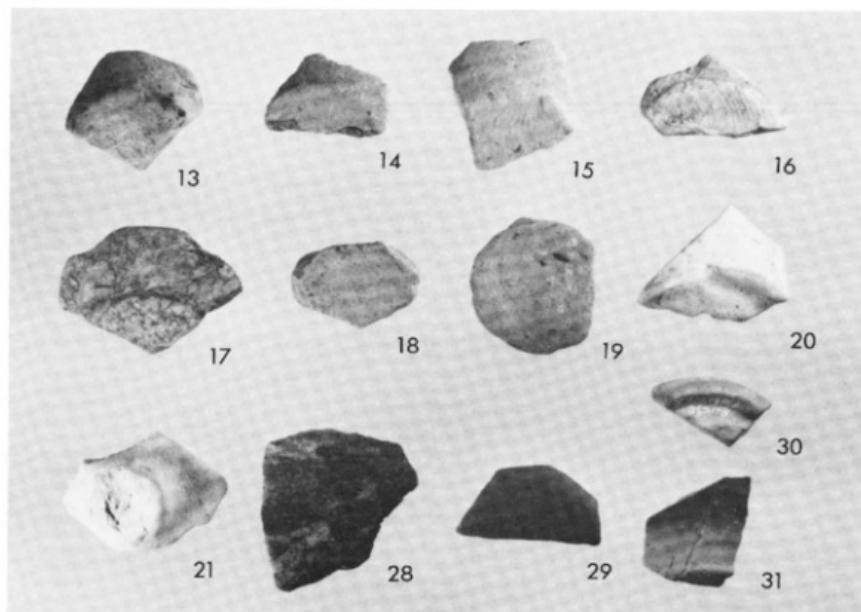
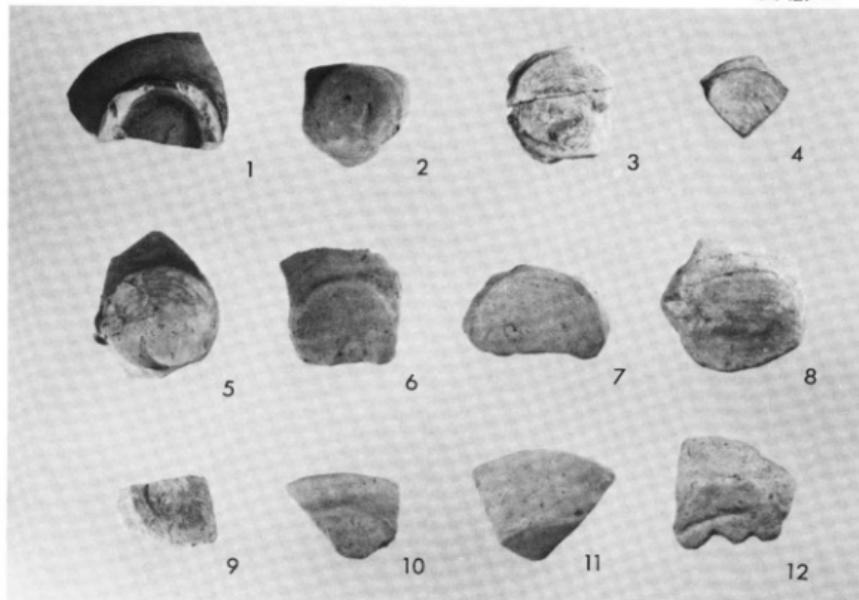
2



2

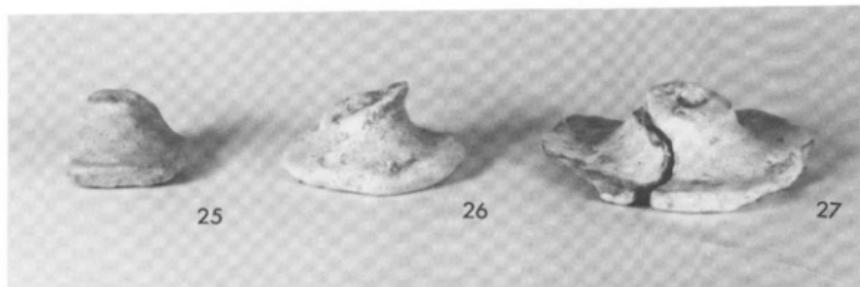
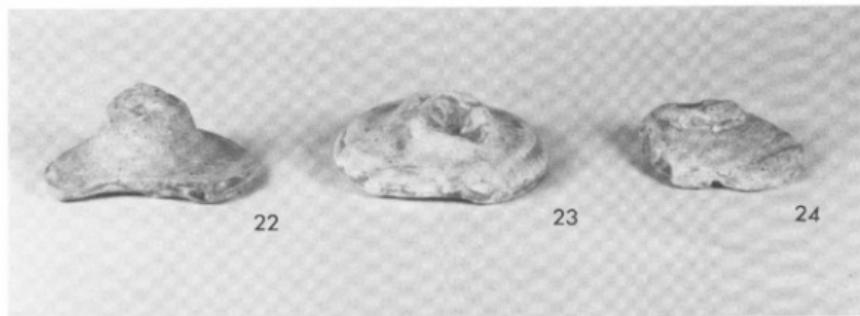
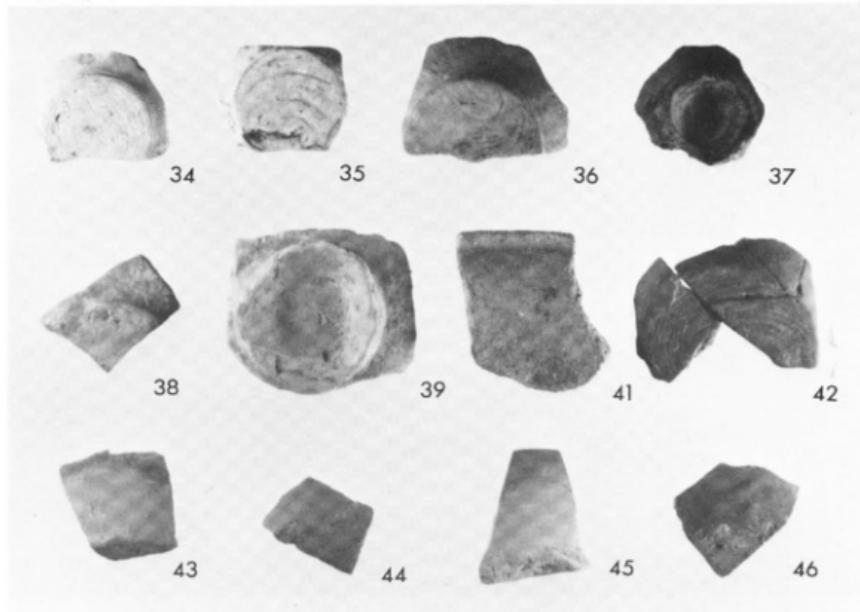


8-1



第1調査区出土遺物(1)

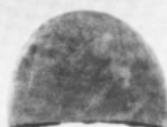
図版 6



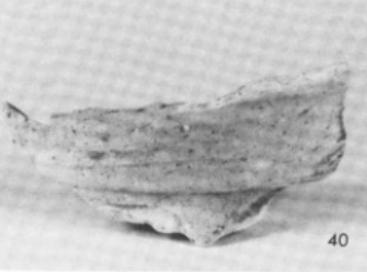
第1調査区出土遺物(2)



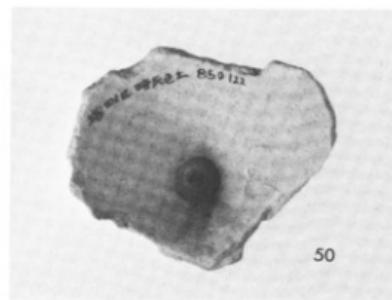
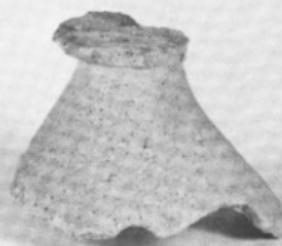
32



33



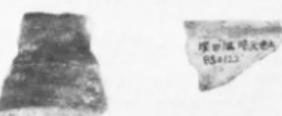
40



50



47



49



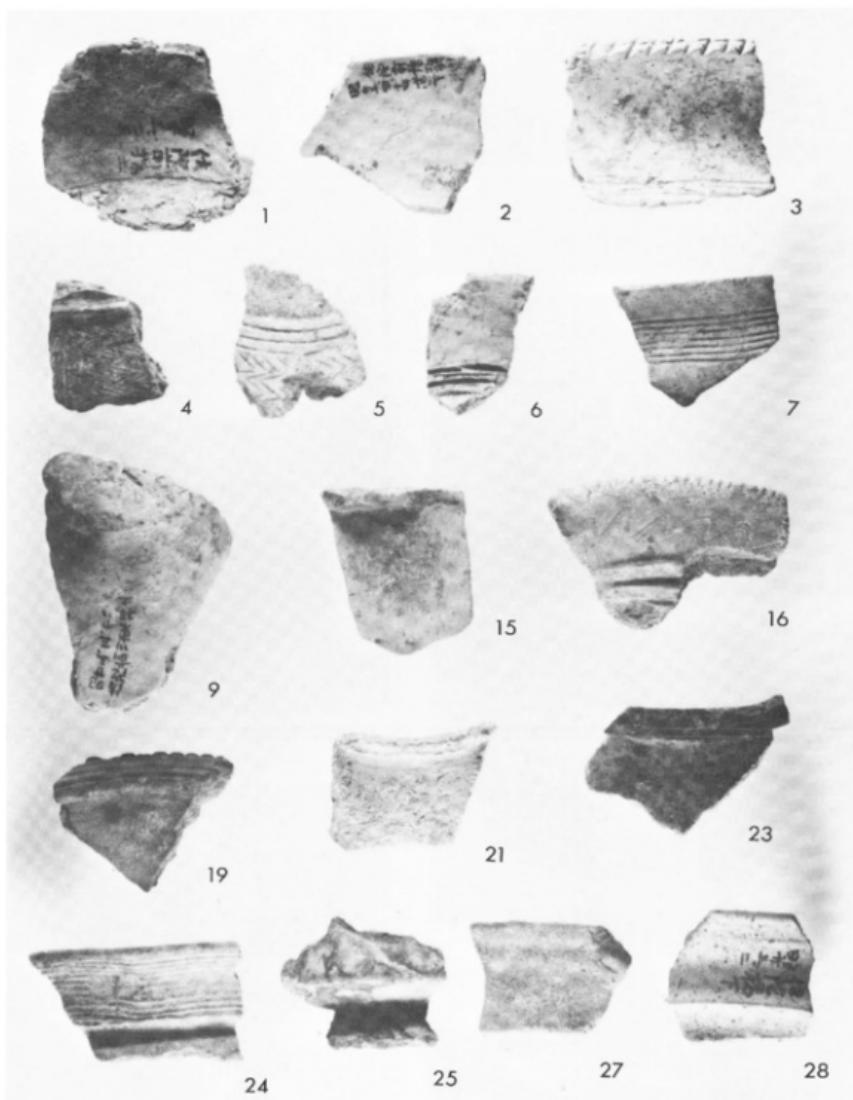
51



48

第1調査区出土遺物(3)

図版 8



佐太前遺跡出土遺物

第二輯 俗文化語彙研究

◎ 俗文化語彙